

心理学評論

## 投稿・執筆の規定

心理学評論刊行会

2026年1月

# はじめに

## 1. 『心理学評論』刊行の目的

本誌は、心理学とその関連領域の研究者、およびこの方面に関心をもつ人々に、自由な研究討論の場を提供することによって、心理学および関連科学の発展に寄与することを目的として、1957（昭和32）年に創刊された。以来、創刊号をVol.1とし、現在にいたるまで継続して刊行されている。

本誌は広い立場からの理論的考察や展望を中心とした学術論文から構成されている。また、学会の機関誌ではないため、学会という組織の制約を受けず、人々に自由な討論の場を提供しうるという重要な意義をもつて いる。

## 2. 刊行物の概要

論文は、広く学際的な視野の広がりをもつ心理学のレビュー（評論）を特徴としている。

本誌の内容は、任意のテーマについて的一般投稿論文と、特定のテーマについて編集委員が企画し執筆を依頼した特集論文からなり、自由テーマの一般号と特集号とを各2号ずつ、合わせて年4回刊行している。

いずれの論文も、単に一つの観察や実験などの研究成果を発表するのではなく、それらをふまえたより広い立場からの理論的考察や展望、さらに既発表論文に対する批判や討論などの質の高い内容が望まれる。そのため、一般投稿論文掲載の可否については、複数の審査者による慎重な評価に基づいて編集委員会が決定している。

Vol.40からは判型を大型化し、カラー印刷の導入、データベースの更新に努め、キーワードによる論文名、執筆者名の検索もできるようになっている。

## 3. 本誌への投稿

先に述べたように、本誌は学会誌ではないため、投稿者の資格に制限はない。自由なテーマでの多様な論文の投稿が望まれている。

投稿にあたっては、次の「投稿規定」、「執筆規定」、「投稿から掲載まで」を参照されたい。

## 4. 著作権

論文刊行にあたっては、著作権の譲渡を求めない。（投稿規定参照）

## 投稿規定

1. 論文は未発表で、心理学および関連科学の発展に寄与するものであることを原則とする。
2. 論文は、単に一つの観察、実験などの研究の発表を主目的とするものでなく、
  - (1) それらを踏まえたより広い立場からの理論的考察
  - (2) 理論的展望、総説
  - (3) すでに発表された論文に対する批判、討論
  - (4) 各専門あるいは境界領域活動の現状と評価などを内容とするものが望まれる。
3. 投稿者の資格に制限はない。投稿論文の掲載の可否は、学問的価値の観点から編集委員会の責任において決定される。
4. 論文の長さは原則として本誌 20 ページ以内（図表などを全て含む）とし、超過する場合も、長さは 25 ページ前後までとする。超過分は、投稿論文の場合執筆者の自己負担とする。詳しくは執筆規定の項を参照のこと。
5. 編集の都合上、執筆者の了解のもとに、文意を損なわぬ範囲内で字句の修正、図表の体裁の改変などを行うことがある。
6. 英文要約は投稿前にできるだけネイティブスピーカーの校閲を受けること。
7. 図表等を他文献から引用する場合は、著者の責任で、原著者および出版社の許可を得ること。
8. 著者には、本誌 1 部、および、論文 1 篇につき抜刷 20 部を贈呈する。それ以上の部数を必要とする場合は著者の実費負担とする。
9. 執筆の際は、次頁以降の「執筆規定」に従うこと。
10. 投稿する際は、最後にある「投稿から掲載まで」を参照のこと。
11. 刊行後の論文の著作権は著者に属する。  
なお、旧規定に基づき、2025 年度(Vol. 68)までに刊行された論文の著作権は心理学評論刊行会に属する。
12. 著者は、心理学評論刊行会による論文の印刷出版と販売、また、心理学刊行会および心理学刊行会が認めた第三者によるインターネット上の販売及び公開について、書面による同意を行う。

# 執筆規定

## 1. 一般的な注意事項

論文は電子版(PDF)として作成すること。手書きの原稿は受け付けない。Microsoft Word等のワードプロセッサーソフトウェアの利用を推奨する。

### 1.1 用紙の設定

A4判の用紙を縦長に使用し、文字は10.5ポイントあるいはそれ以上の大きさにして、各ページ30字×20行に印字する。行間は1行以上あけ、用紙の上下左右に十分な余白を残す(付録2・3参照)。

### 1.2 論文の長さ

原則として、論文の長さは本誌20ページ以内(英文要約、図表、文献、付録等すべてを含めて)とする。A4判の用紙に1ページ600字で印字した場合には、およそ63枚に相当する。この限度を超過する場合にも、25ページ前後まで(同じく、およそ80枚相当)を限度とする。ただし、特集号の論文で、編集担当委員が必要と認めた場合はこの限りではない。各自でページ概算をする場合には、本誌1ページを1900字として計算するとよい。

### 1.3 英文要約およびキーワード

英文要約は、100~180語とし、12ポイント程度の大きさで印字するのが望ましい。要約には、5~6個のキーワードをつけておく(付録1参照)。出来るだけネイティブスピーカーの校閲を受けておくこと。なお、日本語による要旨には、英語キーワードに対応した日本語キーワードをつけておく。

### 1.4 添付票

論文投稿時には、次の各事項を記入した添付票をつける(付録4参照)。

- (1) 表題：日本語表記およびその英訳
- (2) 欄外略題：著者の姓を含めて20字以内が望ましい。
- (3) 著者名：氏名およびそのローマ字表記
- (4) 出身学校：大学卒業以降について記し、それぞれに西暦年をつける。
- (5) 所属機関：機関名、その英語表記、職名・身分、機関の所在地、電話・FAX番号、電子メールアドレス
- (6) 現住所：電話・FAX番号、電子メールアドレスがあればつける。
- (7) 連絡先の指定：所属機関あるいは現住所のいずれか一方
- (8) 原稿枚数：図・表および日本語による要旨を除いた数
- (9) 図(うち、カラーがあればその個数)・表・付録の数
- (10) 脚注の数
- (11) 引用文献の数
- (12) 英文要約の語数(100~180語)と日本語による要旨の枚数
- (13) キーワード：日本語及び欧語(5~6個)

(14) 論文の分野：次の中から選択のこと（複数可）。

知覚・記憶・注意・学習・認知・発達・動物・生理・脳・健康・教育・社会・臨床・人格・ジェンダー・犯罪・産業・文化・方法・原理・歴史

(15) 論文（最初の原稿）送付日

注：著者が複数の場合は、(3), (4), (5), (6) はすべてについて記入する。

(16) 使用ワープロ：OS

ワープロ（名称、バージョン）：OS（Windows, Mac, Linux など）

## 2. 原稿の作成

### 2.1 文字

文字は常用漢字、現代かなづかいを原則とする。

### 2.2 欧語

本文中には、以下の場合を除き、原則として欧語を用いない。特に名詞（熟語も含む）以外の言葉はこなして適切な日本語表記にすることが望ましい。

(1) 欧文文献の著者名、欧文書籍・雑誌名

(2) 外国人名。なお、特定の文献をあげないときには、初出時に、W. James のようにイニシアルをつけておく。

(3) 欧語術語を本文中で用いるのは望ましいことではないが、特に欧語での表現を明示しておきたい場合や、必要な場合にのみ、初出の日本語表現の後ろに（）をつけて欧語を示しておく。たとえば、系列学習（serial learning）のように書く。ただし、日本語の定訳がない場合には、欧語を使うことができる。

(4) 次項（2.3, 2.4, 2.5）に示すもの

### 2.3 略語

専門用語の略語を用いるときには、初出時に欧語のフルスペルを書き、後に略語を示す。たとえば、短期記憶（short-term memory : STM）のように書き、以後本文中に略号を使うことができる。なお、略号には大文字を用いる。

### 2.4 イタリック体

次のものはイタリックとする。原稿の当該箇所に下線を入れイタリックであることを明示しておく。（）内に例を示す。

(1) 欧文書籍の表題と欧文雑誌の名称、巻（Vol.）数字

（Handbook of psycholinguistics ; Psychological Review, 102）

(2) 数式中の数を表す文字（i, j）

(3) 数値や量を表す文字（報酬の量 R, 遅延時間 D, 報酬の価値 V）

- (4) 統計法に用いられる記号 (SD, F, t, p, df, r)
- (5) 動植物のラテン語学名, 特殊な術語 (*Phaseolus vulgaris*)

## 2.5 特殊な文字

ギリシア文字など, 特殊な文字の場合は指定しておく。また, アクセントやウムラウトなどのつく  
欧字も印を付けて注意を促しておくことが望ましい。

## 2.6 カタカナ

動物名, 植物名などは原則としてカタカナで書き, 必要な場合には原名, 学名を( )に入れる。ま  
た, 外国語, 外国国名, 外国情名は原則としてカタカナで書く。

アカゲザル (*rhesus monkey*)  
ニホンザル (*Macaca fuscata*)

## 2.7 数字

数字は, 原則としてアラビア数字を用いる。ただし, 「二者択一」などの熟語の場合は漢数字を用いる。  
一つと 1 つ, 二次元と 2 次元等については, 執筆者の選択に任せられているが, 同一論文内で混用し  
ないように心がける。

## 2.8 脚注

注はできるだけ避けること。その内容をこなして本文中に組み入れることが望ましい。やむをえず注  
を入れることが必要なときは脚注とし, 冗長にならないようにして, 本文中の対応箇所を通し番号によ  
って明示する。

## 2.9 図表

図表には, 図表番号, 表題, および簡潔な説明をつける。日本心理学会刊行の「執筆・投稿の手引き」  
のスタイルに準拠する。

### 2.9.1 図表の番号

番号は, 図 1, 表 1 などとする。写真も図と同じ取り扱いになるので, 番号を通してつける。図表  
の表題および説明に英文を用いてもよいが, その場合, 図表の番号は *Figure 1, Table 1* などと  
する。ただし, 1 論文中に和文, 英文を混在させてはならない。

### 2.9.2 図表の位置

図表の挿入位置は原稿横の余白または原稿中の空白に図表番号で示す。

### 2.9.3 引用図表

引用図表には著者名と年号を明記する。また, それをもとに著者が改変した場合明記すること。 例  
えば, (Funahashi et al., 1997), (Fries et al., 2001 より改変), (Johnson et

al., 1990 をもとに作図) 等。必要な場合、掲載前に著者の責任で文献の原著者および出版社の許可を得ること。

#### 2.9.4 作成上の注意

図表は細部までわかるよう明瞭に作成する。本誌の欄内に収まるように、大きさ、形、字数などを調整すること。文字の大きさには特に注意する。

#### 2.9.5 カラーの図

一般投稿論文の図は原則としてモノクロとし、カラーとする場合は実費を負担する。

### 3. 引用

日本心理学会刊行の「執筆・投稿の手引き」のスタイルに準拠する。

以下に、原著が歌語の場合と日本語の場合に分けて、基本的な事項を示す。これらは参考にとどめ、日本心理学会による手引きが改訂された場合はそれに従う。

#### 3.1 本文中における文献の引用

##### 3.1.1 文章中に引用するとき

###### (1) 著者が1人のとき

Baddeley (2000), 下條 (1996)

ただし、同一のパラグラフ内では、他の文献と混同されるおそれがない限り、2度目の引用から刊行年を省略してもよい。

(2) 著者が2人のときは、両者を & およびナカグロ (・) でつなぐ。また、引用のたびに両著者の姓を書く。

Treisman & Gelade (1980)

井垣・坂上 (2003)

ただし、(1)と同様に、同じパラグラフ内で何度も繰り返すような場合には、紛らわしくない限り、Treisman と Gelade, 井垣と坂上というふうに刊行年を省略して記述してもよい。

(3) 著者が3人以上のときは、初出の場合から第2著者以下の姓は省略して、et al., 他で表す。&, ナカグロを用いる。

Raymond et al. (1992)

南風原他 (2001)

上記(1), (2)と同様の理由で、刊行年を省略するときには、Raymond 他, 南風原他と記述する。

### 3.1.2 文章後に引用するとき

#### (1) 著者が1人のとき

(Roediger, 1990), (高木, 2000)

(2) 著者が2人のときは、両者を & およびナカグロ (・) でつなぎ、引用のたびに両著者の姓を書く。

(Lave & Wenger, 1991)

(水原・石田, 1998)

(3) 著者が3人以上のときは、初出から第2著者以下の姓は省略して et al. および他を用いる。

(Nelson et al., 1993)

(巖島他, 2003)

(4) 異なる著者が同一性で混同の恐れがある場合、第1著者の名あるいはイニシャルを添える。

### 3.1.3 複数の文献を引用するとき

文章後に引用するときは、引用文献欄の配列順にならう。刊行年の順ではないことに留意されたい。

印刷中の文献は、in press, 印刷中と書き、最後におく。

なお、文章中に引用するときは、必要に応じて刊行年の順にあげることができる。

(Hobson, 1986a, 1986b, 1993, in press)

(Ames, 1992; Maehr & Anderman, 1993; Patrick et al., 2001)

(藤田, 1996; Graf & Komatsu, 1994; Komatsu, Graf, & Utti, 1995; 岡田, 1994)

### 3.1.4 その他の注意点

日本心理学会刊行の「執筆・投稿の手引き」と本節の記述が一貫しない場合、前者の規定に従う。

## 3.2 文章の引用

文献の記述の一部を引用する場合は、必ず当該ページを示しておく。引用文は原著に正確に従うこと。原著が日本語のときには、引用文に「」をつけ、欧語の引用文は“”内に入れて、その後の（）内にページを入れる。

“There is no conscious perception without attention.” (Mack & Rock, 1998, p.14)

池田（1994）は、（中略）「船が他の乗り物に比べて酔いやすいのは、人間が最も気持ちの悪くなりやすい周期で船が揺れることが多いからである」(p.142)と述べている。

### 3.3 図表の引用

2.9.3 参照。

## 4. 引用文献

書式は日本心理学会刊行の「執筆・投稿の手引き」に従う。以下に概要を示す。

4.1 引用文献は、著者名、刊行年（カッコに入れる）、表題、その他の順に記載する。

4.2 雑誌の場合は誌名、巻、ページ、書籍の場合は出版社名（所在地：名前の順）、さらに、編集本等でその一部を引用した場合は該当ページを示す。出版社所在地は、よく知られている都市名のときには不要であるが、あまり知られていない場合、また他の都市と混同され得る場合には、州名（あるいは国名）をともに記す。

4.3 各文献の行間、余白は充分にとり、読みやすいよう努める。

4.4 引用された文献については、本文中の引用と文献リストのそれとの綴りや年度が食い違っていないかどうか、また該当する論文の所載ページが正しいかどうか等に注意し、正確で完全な文献リストの作成に努めること。

## 投稿から掲載まで

- 一般投稿の際は、下記を添付したメールを心理学評論刊行会のメールアドレスに送信する。

(1) 論文原稿（図表を含む）のPDF 2個

うち1個には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等は入れないこと

(2) 100～180語の英文要約および日本語による要旨のPDF

（それぞれ5～6項目のキーワードをつける） 2個

うち1個には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等は入れないこと

(3) 添付票のPDF 1個

図は審査に耐え得るだけの鮮明さを保つこと（掲載が決定した際はあらためて印刷用のより鮮明な図を提出する）。メールのsubject（件名）欄には「一般投稿（送信者の氏名）」と記載する。

この方法が困難である場合、予め下記の心理学評論刊行会に相談されたい。

- 論文原稿は、表題のあるページを第1ページにし、以下、英文要約、日本語による要旨、本文、引用文献、脚注、図表およびその表題・説明、付録の順に重ねる。本文には頁番号をつけ、引用文献には通し番号をつけておく。投稿にあたっては、原稿に必ず添付票を添えておくこと。
- 投稿論文を事務局で受け取った日をもって受稿年月日とし、著者に連絡される。その後編集委員会で審査者が決定され、審査過程に入る。審査者、編集委員の判定を受けて、初回審査結果が著者に通知される。
- 改稿が求められた場合は、審査者のコメントを尊重し、また、改稿部分が明確に示されている新旧対照表をつけて再度提出する。再提出された論文は再審査され、その結果掲載が可となれば、その旨を著者に連絡し、その日を受理年月日とする。なお、再々審査されることもある。
- 受理の通知と同時に、本文のファイル（ワードプロセッサー文書）とPDF、および鮮明な図のファイル（JPEGまたはEPS）の送付が求められる。
- 掲載論文は、特別な場合を除いて、初校のみが著者校正となる。初校は原稿との照合を主とし、修正、改訂は最小限にとどめねばならない。再校以降は原則的に事務局が担当する。
- 著者校正の時点で、論文出版に関する同意書への署名を求める。
- 論文が掲載された場合、著者には、本誌1部、および抜刷20部を贈呈する。それ以上の部数を必要とする時は、著者の実費負担とする。また、論文の長さが12ページを超える場合も、超過分の実費を自己負担とする。
- 投稿原稿の送り先、その他、問い合わせ等は、以下まで。

心理学評論刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部心理学研究室

TEL : 075-753-2753 (2861)

FAX : 075-753-2835

E-mail : [hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp)

URL : <https://www.sjpr.jp/>

付録 1. アブストラクト見本 (12pt, ダブルスペース)  
(吉田和子・石井信 (2004) 強化学習の脳内機構と情動による制御心理学評論, 47, 150.より)

Reinforcement learning:

The brain mechanism and emotional control

Wako YOSHIDA and Shin ISHII

Nara Institute of Science and Technology

Selecting appropriate behaviors in a complicated environment is crucial for animals like humans to survive. Conditioning models, such as the Rescorla-Wagner model, successfully explained how animals make prediction about rewards and use the prediction to control their behaviors. However, those models often ignored effects of future rewards. The estimation of rewards accumulated toward the future are important for acquiring the optimal behavior sequence; reinforcement learning (RL) can deal with this problem, and recent physiological studies have revealed that the real brain seems to realize an RL-like learning scheme. Animals' behaviors are controlled not only by external rewards but also by internal emotions. Recently, it has also been suggested that meta-parameters used in the machine-learning RL may correspond to

neuromodulators that regulate emotional states in the brain. In this article, we introduce the RL, the formulation and the relation with conditioning, and discuss emotional effects on the RL, the behavioral control based on selective attention and its neural mechanism.

Key words: conditioning, reinforcement learning, selective attention, novelty, neuromodulators

## 付録 2a. 本文見本（30字 × 20行）

（鈴木宏昭・開一夫（2003）洞察問題解決への制約論的アプローチ 心理学評論, 46, 211-212. より）

### 1. はじめに

洞察は、人間の創造的認知をもっともよく体現する心理現象の一つである。この現象は Gestalt 心理学によってはじめて体系的に取り上げられたが、現象の再現可能性や、分析方法などが十分に発達していなかつたため、その後の行動主義においても、また 80 年代までの認知心理学においても十分な形で研究されることはなかった。しかしながら、90 年代にはいると Sternberg や Finke らのグループを中心にして、洞察やその他の創造的認知の研究は科学的な探求の対象として多くの研究者の注目を集めることになった（Finke, Ward, & Smith, 1992; Smith, Ward, & Finke, 1995; Sternberg & Davidson, 1995; Ward, Smith, & Vaid, 1997）。

本研究では洞察問題解決の研究動向を概観し、洞察の理論の構築のための要件を明らかにする。そしてここで明らかにされた要件を満たすべく提案された制約の動的緩和理論に基づく研究の展開を報告する。そして、今後この分野における研究の方向について検討する。

### 2. 洞察問題の性質と解決の特徴

洞察研究では非定型的な解法が必要とされる問題が用いられる。これらの問題は、通常の解法では解決することができないため、問

## 付録 2b. 本文見本

(上田卓司・椎名乾平・浅川伸一 (2003) 反応時間の確率モデル 心理学評論, 46, 253. をもとに作成)

まず、仮定される情報蓄積機構の性質からランダムウォークモデルとカウンタ・モデルという2つのクラスに大別可能である。前者は情報蓄積が基本的に1つ（の見本関数）として表現され、後者は選択肢に対応した数だけある。またこれらのクラスについて各々、時間・（状態）空間が離散的あるいは連続的であるかにより4つのパターンに区分される。以上、モデルは8つのクラスに分類可能である（表1）。次の節からは、この分類に従い主要なモデルについて取り上げて行くことにする。（以下省略）

表 1

### 2. カウンタ・モデル

逐次抽出モデルの主要なクラスであるカウンタ・モデル（あるいは、計数モデル）は、選択課題における反応時間・反応率を予測するモデルである。カウンタ・モデルは、刺激の種類あるいは反応選択肢の数に応じて心内のカウンタ（counter：計数器もしくは情報蓄積機構）がそれぞれ独立に、情報蓄積を行うと仮定する。すなわち、刺激提示と同時に各反応（たとえば、AとB）に対応したカウンタが作動を開始、情報が蓄積され、先に閾値Cに達したカウンタの方を反応とする（図1）。この過程を、stageモデルの観点からみると、複数のカウンタ（=反応選択肢）による並列自動打ち切りのレースモデルということになる。

図 1

### 付録 3. 引用文献見本

(平田謙次 (2003) 目標による動機づけ過程—仕事文脈を中心にして—心理学評論 46, 136-138.より、抜粋して作成)

### 文 献

- Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261-271.
- Atkinson, W. (1957). Motivational determinants of risk taking behavior. *Psychological Review*, 64, 359-372.
- Bandura, A. (1989). Self-regulation of motivation and action through internal standards and goal systems. In L. A. Pervin (Ed.), *Goal concepts in personality and social psychology* (pp. 19-85). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bandura, A., & Cervone, D. (1983). Self-evaluative and self-efficacy mechanisms governing the motivational effects of goal systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 191-215.
- Barsalou, L. W. (1984). A hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211-227.
- Bloom, B. S. (1956). *Taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.
- 平田謙次・中西晶 (1999) 自己決定感を高める多目標解釈過程 産業・組織心理学会第 15 回発表論文集, 60-63.
- Hughes, C. L. (1965). *Goal setting*. New York: American

Management Association. 小野 豊明・戸田 忠一（訳）（1966）目標

設定 ダイヤモンド社.

鹿毛 雅弘（1996）内発的動機づけと教育評価 風間書房.

Krahe, B. (1992). Personality and social psychology: Towards

synthesis. Thousand Oaks, CA: Sage.

Locke, E. A., Shaw, K. N., Saari, L. M., & Latham, G. P. (1981). Goal

setting and task performance. Psychological Bulletin, 90, 125-152.

**添付票（投稿論文）**

(1) 表題：日本語：

英語：

(2) 欄外略題（著者の姓を含めて 20 字以内が望ましい。）：

(3) 著者名： (ローマ字表記： )

(4) 出身学校： 年 大学 学部卒業

年 大学大学院 研究科修士課程

年 大学大学院 研究科博士課程

(5) 所属機関：機関名：

英語表記：

職名・身分：

所在地：〒

電話： FAX：

E-mail：

(6) 現住所： 〒

電話： (携帯電話： ) FAX：

E-mail：

(7) 連絡先の指定： 所属機関 現住所

(8) 原稿枚数： 枚

(9) 図： 個 (カラー図がある場合はその図番号 )， 表： 個， 付録： 個

(10) 脚注： 個

(11) 引用文献： 個

(12) 英文要約 (100~180 語)： 語， 日本語による要旨： 枚

(13) Key words：

キーワード：

(14) 論文の分野：

(15) 論文（最初の論文）送付日： 年 月 日

(16) 使用 OS: ワープロ (該当するものに○をつけ名称を記入)

[ ] Windows ( )

[ ] Mac ( )

[ ] その他 ( )

ワープロソフト 名称： バージョン：

注：著者が複数の場合は、(3), (4), (5), (6) はすべてについてご記入ください。